



文末詞の待遇的な機能についての一考察

中西, 泰洋

(Citation)

神戸大学留学生センター紀要, 1:77-94

(Issue Date)

1993-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/00178733>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00178733>



文末詞の待遇的な機能についての一考察

中 西 泰 洋

0. はじめに

現代日本語の対話文表現においては、その文表現の文末に文末詞（次節で詳述）が多用され、表現を生き生きとしたものにし、話しことばの一つの特徴ともなっている。

「弘之もいよいよ受験だな。近ごろは少し気合いが入ってきたようだね。」

「ええ、もう高3ですからね。何とか現役で合格してほしいものですわ。」

「しかし、大学受験はなかなか大変だよ。競争が激しいから。」

「でも、あの子はあれで本番に強いから、案外うまくいくかも知れませんわよ。」

「そうはうまくいかないかも知れんぞ。何か手を打たなくてもいいのか。」

「何か手を打たなければいけませんの。」

「今からでも塾に行かすか、家庭教師をつけるかした方がいいんじゃないか。」

「それじゃ、一度、担任の先生に相談してみますわ。」

上記の対話文表現（筆者の作例）の下線を施した部分が文末詞の代表的なものである。

「ね」・「よ」・「か」等は、日本語教育においても初級の段階から導入されるが、日本に暮らす学習者は日常生活でよく耳にすることもあって、文末詞を多用する傾向があるように思われる。このことは、彼らが日本語の話しことばの一つの特徴を捉えていることを証明している。しかし、その使われ方をみていると、上野(1972)が指摘しているように、「相手に不快な気持ちを起こさせかねない」文末詞の使い方が見受けられるのである。この事實は、文末詞が待遇的な機能を有するものであることと共に、教授にあたっては文末詞についての語用論の立場からの情報を学習者に与えなければならないことを教えてくれている。

本稿では、対話文表現における文末詞について、登場人物相互の人間関係や表現内容等と文末詞の待遇的な射程距離（次節で詳述）とに焦点を当て、文末詞の待遇的な機能について語用論的な視点から考察しようとするものである。

資料としては、現代小説『二十歳の設計』（源氏鶏太 作）の作中人物の会話部

分を取り上げた。会話に登場する人物・話題・場面等の文脈から、ひとまとまりの談話として会話部分を取り上げ、その談話を成り立たせている文表現を考察の対象とした。

その資料性という点について言えば、自然談話と違って、小説に記された文表現は作家自身の表現意図に基づき、独自の言語感覚や感性等によって表現されたものであり、その意味では会話部分の文表現といえども、純粋な話しことばとは言えないであろう。しかしながら、この小説が発表されてから多くの版を重ね、日本語を母語とする数多くの読者に支持されているという事実は、この作家の日本語文表現が多くの日本語母語話者にとって許容されるものであることを物語っている。この意味において、本研究の考察対象としての、この資料の妥当性も認められると思われる。

1. 文末詞と文末詞の待遇的な射程距離について

1. 1 文末詞について

文末詞は、一般的に終助詞と呼ばれているものである。日本語教育においても、専ら終助詞という名称が使われている。

藤原(1982)は、これまで終助詞または感動助詞と呼ばれてきたものを、文表現における独立性の強い文末の特定成分として捉え直し、従来の助詞観を脱して、文末詞と命名したのである。

その説によれば、文表現は表現者の表現意識と表現意図に基づく「訴え」の表現であり、その文頭から文末にいたるまで、一貫して「訴え」通しているものである、と言える。それ故に、文表現のあらゆる部分において、その「訴え」の成分があらわれ得るのである。つまり、文表現は、話し手の意図を大きく打ち出し、主に知的なものを表すとみられる基幹部(述部・主部・修飾部)と、表現を相手にどのようにもちかけるかを示し、主に情的なものを表すとみられる遊離部(文末部・感動部・間投部・接続部・提示部)とによって構成されており、「訴え」成分を含む各部が相互に関連しあって完結せられるのである。そして、日本語文表現においては、その文表現法の文末決定性によって、文末部が重視され、文末部の「訴え」成分が文表現上の重点となる傾向が特に強いのである。その文末の特定の「訴え成分」としては、文末の声調・文末の訴え音・文末詞をあげているが、文末詞は他の文末の特定の「訴え成分」とは違って、明白な文法形態としてあらわれるものである。

そして、文末詞の機能については次の三つをあげている。

1. 文表現特定化の機能
2. 叙述構造収約の機能
3. 文の待遇表現の流れの収約の機能

藤原(1982)で述べられた三つの機能の中で特に注目されるのは、3. 文の待遇表現の流れの収約の機能についての指摘であり、これは文末詞の研究・考察に対して明確な待遇的視点を与えるものであると言えよう。

以上をまとめれば、文表現の基本性是对他的な「訴え」の表現であり、その文表現の末尾にあって、文末の特定の訴え成分となるのが文末詞である。その文末の特定成分である文末詞は文表現を特定化し、文としての叙述構造を収約すると共に、待遇表現として全的に収約し、これを相手に訴えかけるものである、と言える。

1. 2 文末詞の待遇的な射程距離について

われわれは自己の内面に生じた認識や思念や感情などを他に伝えようとして表現活動をする。言語表現活動の場合は、それが文表現という形で実現されるのが普通である。その文表現は、表現者の表現意識と表現意図に基づき、表現効果を考へて、具体的な場面や相手に応じて語詞や形式を選択するという造文活動により生成されるものである。対話文表現においては、話し手は自己の表現内容が聞き手に伝わったかどうかを確かめつつ話を進めていく。この時、聞き手の目や表情を見るのと同じように、文表現の文末に文末詞を用いることによって、聞き手の心に表現内容を届けようとするのである。

ひとは個々に心理的領域を有し、相互の人間関係に基づいて一定の心理的な距離を保ちつつ存在している。親疎の関係で言えば、当然のことながら、親しい間柄では両者の心理的な距離は近いし、疎の間柄では両者の心理的な距離は遠いということになる。相互の心理的な距離を決定する要素は複雑であり、様々に考えられ得るが、親疎の関係が最も重要なものであると思われる。われわれは、その心理的な距離を考慮し、相手に応じた「訴え」の文表現活動を行っているのであり、そこに活躍するのが文末詞である。対話文表現において、話し手は文末詞で文表現をしめくくることによって、相互の心理的な距離をこえて、表現内容を聞き手の心理的領域にまで訴えかける。この時、どの文末詞を用いるかによって、聞き手の心理的領域への入りこみ方が違ってくると考えられる。つまり、聞き手の心理的領域へ深く入りこむ文末詞と、そうではない文末詞とがあると考えられる

のである。前者は待遇的な射程距離の長い文末詞であり、後者は待遇的な射程距離の短い文末詞であると言うことになる。

中西(1992・1993)は、日本語文表現の文末詞と中国語文表現の語気詞とを比較対照させ、その意味と機能について考察したものであるが、文末詞の待遇的な射程距離に長短のあることを観察している。そこでは、基本的な文末詞を次のように分類した。

◇よびかけの文末詞 「な」・「ね」

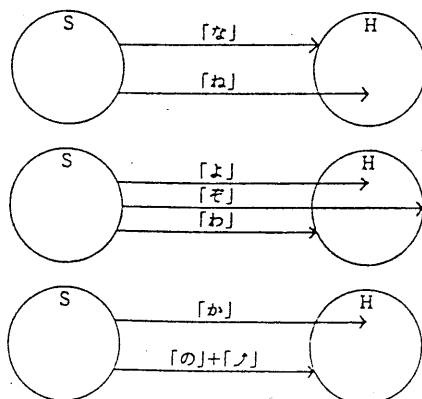
◇なげかけの文末詞 「よ」・「ぞ」・「わ」

◇問いかけの文末詞 「か」・「の」

話し手は文表現を文末詞の「な」や「ね」で結ぶことによって、表現内容についての同意や了解を求めようと聞き手によびかけ、共通の心理的領域をつくり出し、その中で対話を展開しようとするのであり、その待遇的な射程距離については、よびかけの文末詞「ね」の方が「な」よりも長いものであると言える。また、話し手は文表現を文末詞の「よ」や「ぞ」や「わ」で結ぶことによって、表現内容を聞き手になげかけ、聞き手の反応を見ながら対話を展開しようとするのであり、なげかけの文末詞の待遇的な射程距離については、「わ」→「よ」→「ぞ」の順で長くなると言える。そして、話し手は文表現を文末詞の「か」や「の」で結ぶことによって、表現内容について聞き手に問いかけ、聞き手の返答を期待しながら対話を展開しようとするのであり、問いかけの文末詞の待遇的な射程距離については、「か」の方が「の」よりも長いものであると言える。

文末詞の待遇的な射程距離について、仮に図示すれば、次のようになるであろう。

(矢印の長さは相対的なものである。Sは話し手を、Hは聞き手を表す。「∟」は上昇調イントネーションを表す。)



本稿においても、上記の分類に従って、文末詞の待遇的な射程距離と登場人物相互の親疎の関係や表現内容等に焦点を当て、文末詞の待遇的な機能について語用論的な視点から考察したいと思う。

2. 文末詞の待遇的な機能について

現代小説を資料としたこともあって、映画やテレビのドラマの画面でも見ているように話が展開しているが、ひとまとまりの談話と考えられる部分を用例として、文末詞の待遇的な機能について考察していきたいと思う。

〈談話例1〉三年前に母を亡くし、今また、父を亡くした栗村太郎（兄・高校三年）と杏子（妹・中学二年）が登場し、今後の生活について、兄が悄然としている妹に優しく教諭する場面での対話である。二人はこの小説の主人公である。

A 1: 杏子。これから、お兄さんと二人で、やっていこうな。

B 1: どうやって？

A 2: どうやってって、兄妹が、どんな場合にも仲良く、ということだ。

B 2: ジャア、お兄さんは、もう、今までのように、あたしをいじめたりしない？

A 3: 僕が、杏子をいじめたか？

B 3: そうよ。学校の本を隠したり、用事をいつけて、肯かないと、ゲンコツをしたりしたでしょう？

A 4: そうだったなア。

B 4: でしょう？

A 5: ごめん、ごめん。

B 5: あら、あやまらなくてもいいわよ。

A 6: だけど、あれは、杏子が憎らしいからそうしたのではないんだよ。

B 6: ほんと？

A 7: 杏子が、可愛くて仕方がなかったからなんだ。

B 7: ほんと？

A 8: しかし、これからは、絶対に、あんな真似はしない。あくまで、仲良くしよう

B 8: いいわ。

A 9: 杏子。お兄さんは、もう大学へ行くのをよしたよ。

B 9: お父さんが亡くなったから？

A10 : そうなんだ。そして、高校を卒業したら会社へ勤めるよ。

B10 : あたしは？

A11 : お兄さんが、会社へ勤めたら、お父さんが会社から貰った退職慰労金で、何とか、杏子は、高校まで行けるんだ。だから、しっかり勉強するんだよ。

B11 : 勉強するわ。

A12 : それから、お父さんが生きていた頃のように、お手伝をおくわけにいかない。何から何まで、二人でやっていかなければならない。

B12 : ご飯をつくることも？

A13 : そうだよ。

B13 : お洗濯や、お掃除も？

A14 : そうだよ。

B14 : お兄さんに、出来る？あたし、まだ、ちょっとしか出来ないわ。

A15 : そうだろうな。当分は、主として、お兄さんがするから、杏子を手伝ってくれ。洗濯だって、何だって、だ。だけど杏子は、女なんだからそういうことを早くおぼえなければいけない。そのつもりで一所懸命に手伝って、高校へ入る頃には何でも一人で出来るようになってほしいのだ。

B15 : 高校へ入る頃には、きっと出来るようになる、と思うわ。

A16 : 頼むよ。

A17 : 淋しいか。

B16 : (頷き)

A18 : だろうな。お兄さんだって、本当は、淋しいんだ。泣きたいんだ。だけど、我慢しているんだよ。

B17 : どうして？

A19 : だって、お兄さんが泣いたら、杏子だって、泣くだろう？

B18 : 泣くわ。

A20 : そのかわり、杏子が泣いたら、お兄さんだって、泣きたくなる。だから、お互に我慢しような。

B19 : あたし、泣かないわ。

A21 : 杏子。

B20 : なに？

A22 : これからは、二人っきりなんだ。いいか、本当に、二人っきりなんだぞ。

淋しいだけでなしに、悲しいだけでなしに、いろいろと辛いことや苦しいことが、次々に起こってくるだろう。

B21: 辛いことも？

A23: そう。しかし、杏子には、お兄さんがついている。いいか、心配するな。絶対に心配するな。これだけは、いっておく。お兄さんは、きっと杏子を幸せにしてやる。亡くなるとき、お父さんだって、杏子のことを、いちばん心配していたんだぞ。だから、お兄さんは、どんなことがあっても、杏子を幸せにしてやる。

中西(1993)で、文末詞は日常の文表現活動において、基本的に親しみの待遇性(「か」は礼儀の待遇性)を発揮し、文表現の成立の前提となる人間関係における親密度を表す指標とも言えるものであり、親しみの待遇性には心理的に優位の者から劣位の者へという方向性がある、と指摘した。この〈談話例1〉をみても、この指摘はそれほど的外れなものではないということができよう。

この談話は、兄妹という最も親密度が深いと考えられる血縁的な人間関係における対話であるので、文表現に文末詞が多用されているし、常体表現が用いられている(敬体表現が用いられているのはB 3、4の2例のみである)。また、話題の軽重度においても、両親を失い、二人っきりとなった兄妹が今後の生活についての覚悟や決意を確認し合うという重い内容のものである。それ故に、心理的な距離の極めて近い関係にある兄妹であるが、心理的に優位にある兄から劣位にある妹への文表現に文末詞が多く用いられている。血縁的な人間関係における相互の心理的な優劣度は、その時の話題性にもよるが、年齢が高まるにつれて狭まっていくものであると考えられる。

A 1では、話し手は「杏子。」と呼びかけ、「これから、お兄さんと二人で、やっていこう」という誘いを「な」で聞き手に訴えている。両親を失い、兄妹二人で力を合わせて生きていかなければならないというコンテキストにおいては、待遇的な射程距離の短い文末詞「な」で訴えることで、聞き手の心理や意向を十分に配慮した柔らかな勧誘表現となり、優しさの待遇効果を発揮している。「これから、お兄さんと二人で、やっていこうね。」という表現も可能ではあるが、待遇的な射程距離の長い文末詞「ね」では、聞き手に強引な感じを与える勧誘表現となろう。

同じコンテキストで話し手が女性の場合であれば、「これから、お姉さんと二人で、やっていこうな。」と言うことは出来ないので、「これから、お姉さんと二

人で、やっていこうね。」という表現を用いざるを得ない。そこで、聞き手に与える強引な感じを和らげるために、敬体表現を用いた「これから、お姉さんと二人で、やっていきましょうね。」という表現を用いる傾向が強くなることになる。中西(1992)で指摘したように、「な」は、心理的な距離が近いと相互に意識する話し手と聞き手との間において用いられ、親しみや優しさの待遇効果を発揮するものであり、近年の待遇度の低下に伴って、専ら男性に使用されるものである。女性の使用については、年配の女性が「あなた、ちょっと電話に出てくださいな。」というような丁寧な依頼表現とともに用いる場合に限られるのではなかろうか。

また、「これから、お兄さんと二人で、やっていこう。」という表現も可能ではあるが、話題性からみても、このコンテキストにはそぐわないものであると思われる。

B 1では、話し手は相手の柔らかな勧誘表現を受けとめ、「どうやって？」というように、具体的な方途について聞き手に問いかけている。このように、問いかけの文末詞「か」を用いず、疑問を表す語と文末の上昇調イントネーションで、あるいは文末の上昇調イントネーションだけで問いかける表現は、待遇的には、親しい間柄の聞き手に対してだけ許される表現である。この場合は、文末の上昇調イントネーションが文末詞の代わりに問いかけの機能を果たしているのであり、くだけた問いかけとなる。年下の者や女性の話し手が年上の男性に対して用いた場合は、聞き手に少し甘えたような感じを与えると思われる。B 1、2、6、7、9、10、12、13、14、17、20、21が、これに属するものである。B 3、4、A19も形式的には同じであるが、話し手自身が十分に確認したり推測し得る事柄について、聞き手に確認を求めて問いかけるという表現となり、先のグループのものとは区別される。それ故に、妹の表現であるB 3、4には敬体表現の形式が用いられている。また、それほど親しい間柄ではない聞き手を想定した場合の表現は、前者では敬体表現の形式に「か」の付いたものが考えられ、後者では否定表現の形式に「か」の付いたものが考えられるからである。「か」の代わりに、問いかけの文末詞「の」が付いたものも考えられ得るが、この「の」は、あくまでも疑問を表す語または文末の上昇調イントネーションの助けを借り、聞き手に問いかけるものである。

つまり、親密な聞き手に対しては、「ほんと？」(男女用)、「ほんとなの？」(男女用)、「ほんとか？」(男用)等の表現を用いても待遇的に許される。が、親密でない聞き手に対しては、「ほんととすか？」(男女用)、「ほんととすの？」

(女用)等の表現を用いなければ、待遇的にまずいということになる。「ほんとか？」という表現は聞き手にとっては強く感じる表現であるが、親密な聞き手に対しては待遇的な射程距離の長い文末詞「か」を用いて明確に問いかけたとしても、その心理的な親密さが、それを許すのであろう。また、親密でない聞き手に対しては、「ほんとですか？」というように、敬体表現の形式を用いることが心理的な距離を埋めるような働きをすることになり、それが「か」を用いた明確な問いかけを許すのであろう。また、女性は、親密な聞き手に対しては常体表現の形式とともに、親密でない聞き手に対しては敬体表現の形式とともに、待遇的な射程距離の短い文末詞「の」を用いることによって、待遇的に柔らかに問いかけるのである。もちろん、男性も子供や老人や女性に対して優しく問いかける場合は、この「の」を用いるのである。

A 2では、相手の問いかけの言を「どうやってって」と復唱して受け取り、「兄妹が、どんな場合にも仲良く、ということだ。」と自己の判断を示し、返答している。

B 2では、相手の判断を「じゃア」と肯定的に受け取り、「お兄さんは、もう、今までのように、あたしをいじめたりしない？」と文末の上昇調イントネーションで問いかけている。

A 3では、相手の問いかけの内容について、その事実が不明であると受け取り、「僕が、杏子をいじめた」という過去の事実の有無について、待遇的な射程距離の長い文末詞「か」を用いて明確に問いかけている。「僕が、杏子をいじめた？」というように、文末の上昇調イントネーションで問いかける表現も可能ではあるが、相手にとっての事の重大さを考慮して、「か」を用いた明確な問いかけの表現を用いたのであろう。

B 3では、相手の問いかけについて、事実の有ったことを「そうよ。」と返答し、なげかけの文末詞「よ」を用いて聞き手に告知的に訴えている。「よ」は「わ」と比較して待遇的な射程距離の長い文末詞であり、ここでは親密な相手に対して遠慮なく明確に訴えている。「そうです。」、「そうですよ。」、「そうだわ。」、「そうですわ。」という表現は、このコンテキストにはそぐわないものである。この前文を補強するように、「学校の本を隠したり、用事をいいつけて、肯かないと、ゲンコツをしたりしたでしょう？」と、事実を例示し、聞き手に確認を求めるように問いかけている。

A 4では、相手の言を受けて、「そうだった」と過去の自己の行為について確

認め、待遇的な射程距離の短い「なア」で半ば独白的に聞き手に訴えている。待遇的な射程距離の長い「ねエ」を用いた「そうだったねエ。」という表現では、相手をも含めた確認ということになり、このコンテキストにはそぐわない。「なア」、「ねエ」の待遇的な射程距離は、各々「な」、「ね」よりも少し長いと思われる。

B 5では、相手の謝罪の言に対して、「あら」と驚き、「あやまらなくてもいい」という自己の気持ちを待遇的な射程距離の短い「わ」で主張的に表明するとともに、その気持ちを確実に伝えようと、待遇的な射程距離の長い「よ」で聞き手に告知的に訴えている。この複合的な文末詞については不明な点が多いので、今後の大きな課題である。

A 6では、「だけど」と自己の行為の不当性を認めながらも、「あれは、杏子が憎らしいからそうしたのではないんだ」という自己の本意を「よ」で聞き手に告知的に訴えている。ここでも、話し手が聞き手に確実に伝えようという表現心理から、待遇的な射程距離の長い文末詞「よ」が用いられたと考えられる。

B 8では、相手の「あくまで、仲良くしよう。」という誘いの言に対して、「いい」と自己の賛同の気持ちを「わ」で主張的に表明し、聞き手に訴えている。ここでは相手からの誘いに対する返答であるので、待遇的な射程距離の短い「わ」を用いることによって、柔らかな待遇効果を発揮している。

A 9では、「杏子。」と聞き手に呼びかけ、「お兄さんは、もう大学へ行くのをよしした」という自己の決断を「よ」で聞き手に告知的に訴えている。この決断については、聞き手の知らないことであり、待遇的な射程距離の長い文末詞「よ」で確実に告知しようとするのである。「お兄さんは、もう大学へ行くのをよしした。」、「お兄さんは、もう大学へ行くのをよししたんだ。」という表現では、聞き手にとって予想し得る事柄であるという前提が必要となろう。

A10では、相手の「お父さんが亡くなったから?」という問いかけに対して、「そうなんだ。」と断定的に肯定し、「そして、高校を卒業したら会社へ勤める」という今後の身の振り方について、「よ」で聞き手に告知的に訴えている。

A11では、相手の「あたしは?」という問いかけに対して、「お兄さんが、会社へ勤めたら、お父さんが会社から貰った退職慰労金で、何とか、杏子は、高校まで行けるんだ。」という聞き手の置かれた状況を説明し、その状況をふまえて「だから、しっかり勉強するんだ」という聞き手に対する自己の希望を「よ」で聞き手に告知的に訴えている。待遇的な射程距離の長い文末詞「よ」を用いることで、自己の希望を相手に確実に伝えようとするのである。

B11では、相手の希望に添って、「勉強する」という自己の決意を「わ」で主張的に表明し、聞き手に訴えている。

A13、14では、今後の生活では何から何まで二人でやっていかなければならない、という状況を知らされた相手の「ご飯をつくることも?」、「お洗濯や、お掃除も?」という問いかけに対して、それぞれ「そうだ」と肯定し、「よ」で聞き手に告知的に訴えている。この場合、相手の予想したことが間違っていないことを確実に伝えることによって、親密な聞き手に対する丁寧な待遇効果を発揮しているのではなかろうか。

B14では、炊事や洗濯や掃除も二人でしなければならないという、相手の言を受け取り、「お兄さんに、出来る?」と聞き手に問いかけつつ、「あたし、まだ、ちょっとしか出来ない」という自己の能力についての判断を「わ」で主張的に表明し、聞き手に訴えている。

A15では、相手の言に対して、「そうだろう」と推測的に肯定し、「な」で共感的に聞き手に訴えている。相手の能力については十分に想像し得ることであり、待遇的な射程距離の短い文末詞「な」を用いることで、聞き手の心を思いやるといような優しさの待遇効果を発揮している。そして、その共感的な心理状態の中で、「当分は、主として、お兄さんがするから、杏子が手伝ってくれ。洗濯だって、何だって、だ。」と聞き手の不安を取り除きながら要求し、「だけど杏子は、女なんだからそういうことを早くおぼえなければいけない。」と諭し、「そのつもりで一所懸命に手伝って、高校へ入る頃には何でも一人で出来るようになってほしいのだ。」という自己の希望を聞き手に訴えている。この最後の文表現には、聞き手の心理状態と聞き手に要求し、諭し、希望するという文脈から考えて、待遇的な射程距離の長い文末詞「よ」が用いられていないのであり、話し手の待遇的な配慮があるのであろう。

B15では、相手の希望を受けとめ、「高校へ入る頃には、きっと出来るようになる、と思う」という自己の積極的な思いを「わ」で主張的に表明し、聞き手に訴えている。

A16では、相手の言に対して、「頼む」というように信頼の思いで受けとめ、その思いを「よ」で聞き手に告知的に訴えている。待遇的な射程距離の長い文末詞「よ」が用いられることで、確かに頼むという思いが聞き手の心に届くのである。

A17では、聞き手が淋しく思っているのは当然であるという文脈で、「淋しい」

か、どうかを「か」で聞き手に問いかけている。ここでは、自己の淋しさも重なり合って、半ば独白的な、詠嘆的な響きがある。

B16では、相手の問いかけに対して、ことばにはならず、「頷き」という所作で返答している。

A18では、相手の反応に対して、「だろう」と推測的に肯定し、「な」で共感的に聞き手に訴えている。相手の淋しさについては十分に想像し得ることであり、待遇的な射程距離の短い文末詞「な」を用いることで、聞き手の心を思いやるといような優しさの待遇効果を発揮している。そして、「お兄さんだって、本当は、淋しいんだ。泣きたいんだ。だけど、我慢しているんだ」という外面には見せない自己の気持ちを「よ」で聞き手に告知的に訴えている。待遇的な射程距離の長い文末詞「よ」が用いられることで、話し手の気持ちが聞き手の心に深々と届くのである。

B18では、相手の「だって、お兄さんが泣いたら、杏子だって、泣くだろう?」という問いかけに対して、「泣く」という自己の素直な感情を「わ」で主張的に表明し、聞き手に訴えている。

A20では、相手の言を受け、「そのかわり、杏子が泣いたら、お兄さんだって、泣きたくなる。」と自己の感情を訴え、「だから、お互に我慢しよう」という誘いを「な」で聞き手に訴えている。待遇的な射程距離の短い文末詞「な」で訴えることで、淋しくても泣きたいのを必死に堪えている聞き手の心理を十分に思いやった柔らかな勧誘表現となり、優しさの待遇効果を発揮している。

B19では、相手の優しい誘いを受けとめ、「あたし、泣かない」という自己の決意を「わ」で主張的に表明し、聞き手に訴えている。「あたし、泣かない。」「あたし、泣きません。」という表現と比べ、待遇的な射程距離の短い文末詞「わ」が用いられることで、自己の決意を聞き手に確かに伝え、しかも柔らかく聞き手の心に訴えるという待遇効果を発揮している。また、待遇的な射程距離の長い文末詞「よ」を用いた表現では、聞き手の推測し得ない事柄について告知的に訴えることになり、このコンテキストの共感的な心理状態にはそぐわないものである。

A21では、A 9と同じように、「杏子。」と対話の相手を名前で呼びかけている。このように、対面している聞き手に対して、その名前で呼びかけるのは、ひとまとまりの談話の中での話の展開の変化を示すものであろう。それ故、B20で話し手が「なに?」と聞き手に問いかけるのである。ここでは、談話構成からみると、話し手がこれまでの話をまとめあげようと、話をもちかけ直しているのである。

A22では、相手の問いかけに対して、「これからは、二人っきりなんだ。いいか、本当に、二人っきりなんだ」と、これまでの話をしめくくするように、再び今後の二人の置かれた厳しい状況を「ぞ」で聞き手に指示的に訴えている。そして、その状況から考えて十分に起こり得る事態について、「淋しいだけでなしに、悲しいだけでなしに、いろいろと辛いことや苦しいことが、次々に起こってくるだろう。」と推測的に判断し、聞き手に訴えている。ここでは、なげかけの文末詞の中で待遇的な射程距離の最も長い文末詞「ぞ」を用いることによって、聞き手の心を射るように訴えている。また、これまでの文脈を収約するような表現効果をも出していると思われる。

このように、待遇的な射程距離の最も長い文末詞「ぞ」は、親密な人間関係や切実な話題性というようなコンテキストにおいて、その待遇効果を発揮するものである。それ故、緊迫した場面で注意や警告を与える時、離れた相手に何かを訴える時、自らを鼓舞する時など使用範囲が限定され、誤って使用されれば、人間関係を決定的に損なうことにもなりかねないのである。この「ぞ」が自らを鼓舞する独白表現に用いられる場合は、「やるぞ。」「頑張るぞ。」などというように、その表現内容も自ずと限定されているようである。「ぞ」を用いた独白表現については、「な」や「わ」や「か」を用いたものとの比較において検討することを今後の課題としたい。

A23では、相手の「辛いことも？」という問いかけに対して、「そう。」と肯定し、「しかし、杏子には、お兄さんがついていて。いいか、心配するな。絶対に心配するな。これだけは、いっておく。お兄さんは、きっと杏子を幸せにしてやる。」と、聞き手の不安を取り除くように、自己の強い決意を聞き手に訴え、その決意が「亡くなるとき、お父さんだって、杏子のことを、いちばん心配していたんだ」という父の遺志でもあることを、「ぞ」で聞き手に指示的に訴えている。そして、「だから、お兄さんは、どんなことがあっても、杏子を幸せにしてやる。」と、自己の並々ならぬ決意を聞き手に訴えている。ここでも、話し手と聞き手の心理的な親密さと切実な話題性というコンテキストが、待遇的な射程距離の最も長い文末詞「ぞ」の使用を可能にし、その待遇効果を発揮させているのである。

〈談話例2〉二人だけの生活が始まってから5年余の歳月が流れ、栗村太郎は立派な社会人となり、杏子も高校卒業を間近にひかえていた。しかし、両親がいないということで、就職が決まらず、杏子は沈んでいた。そんな妹を励ますため

に、銀座で一緒に食事をしようと二人で歩いていたところ、偶然、会社の同僚の津沢から声をかけられた場面での対話である。

C 1: 栗村君。

A 1: あッ、津沢さん。

C 2: 散歩かね。

A 2: ええ、妹と。

C 3: ああ、妹さんか。

A 3: 杏子。このお方は、会社の津沢重役の息子さんで、やっぱり、東亜物産に勤めていられる津沢敏浩さんだよ。

B 1: 杏子です。

C 4: 津沢です。

C 5: 妹さんといっしょに散歩できるなんて、羨ましいなア。

A 4: どうしてですか。

C 6: 僕には、妹がないからさ。

A 5: しかし、妹というのも、これで、よし悪しなんですよ。

B 2: まあ、ひどいお兄さん。

C 7: ゼイタクをいってはいかん、こんな可愛い妹さんを持っています。

A 6: いや、今のは失言でした。

C 8: これから、どうするんだね。

A 7: 妹と二人で、カレーライスを食べ、そして、私は、ビールを飲むつもりだったんです。

C 9: カレーライスで、ビールか。いいねえ。僕も、ちょうど食事をしようと思っていたところだから、いっしょにどうだね。

A 8: かまわないですか。

C10: 君の方さえかまわなかったら、ぜひ。僕だって、一人よりも三人の方が嬉しいから。

A 9: どうする?

B 3: お兄さんさえよかったら。

C11: それで、きまった。

A10: いい人なんだからな。平気、平気。

C12: ここで、いいでしょう。

A11: ああ、上等です。

C13: 何年生ですか。

B 4: 三年生です。

C14: すると、もうすぐ、ご卒業ですね。

B 5: はい。

C15: どこかへ、ご就職なさるんですか。

A12: 津沢さん。そのことで、私は、近頃、憤慨しているんですよ。

C15: 何を?

A13: 妹は、これでも成績がいいんです。が、どこへ試験に行っても、結局、両親がない、ということで面接で落とされてしまうんです。

C16: そんなバカな。

A14: いえ、本当ですよ。それで妹は、すっかり参っているので私としては、今夜それを慰めてやりたかったのです。

C17: ふーむ。

C18: よろしい。僕が、引受けよう。

B 6: え??

C19: 明日、履歴書を、お兄さんにわたしておいてください。

この談話は、兄妹と兄の会社の同僚との間で交わされた対話であり、話題も日常的なものである。ここでも、会社の同僚という人間関係から、文表現に文末詞が多用されている。それを見ると、Cの文表現に圧倒的に多くの文末詞が用いられており、Aに対する文表現では、その全てが常体表現の形式と共に用いられている。このことから、CがAよりも心理的に優位に立つ人物であることがわかる。また、AのCに対する文表現では、全てが敬体表現の形式であり、文末詞の使用もわずかであることも、相互の心理的な優劣関係を物語っている。そして、CのBに対する文表現では、敬体表現の形式も文末詞も用いられていることから、CはBより心理的には優位に立つが、相互には疎の関係にあることがわかる。

Cの文表現では、2「散歩かね。」、5「妹さんといっしょに散歩できるなんて、羨ましいなア。」、8「これから、どうするんだね。」、9「いいねえ。」、「僕も、ちょうど食事をしようと思っていたところだから、いっしょにどうだね。」、14「すると、もうすぐ、ご卒業ですね。」、16「そんなバカな。」の全てにおいて、よびかけの文末詞を用いることによって、聞き手との共通の心理的領域を作り出し、対話を展開しようとしている。

Aの文表現では、5「しかし、妹というのも、これで、よし悪しなんですよ。」、

12「そのことで、私は、近頃、憤慨しているんですよ。」、14「いえ、本当ですよ。」というように、作り出された共通の心理的領域の中で、聞き手に訴え返し、対話を展開しようとしている。

また、Aの文表現の4「どうしてですかか。」、8「かまわないですかか。」とCの文表現の13「何年生ですかか。」、15「どこかへ、ご就職なさるんですかか。」に用いられている問いかけの文末詞「か」は、言わば、礼儀の待遇性を発揮する文末詞である、と言えるのではなからうか。それは、このように敬体表現の形式と共に用いられる「か」は、人間関係の親疎や心理的な優劣に関わりなく、用いられ得るからであろう。

最後に、CとBの対話部分は短いものであるが、疎の関係にある話し手と聞き手との典型的な対話例であろう。人間関係が疎である場合の話しかけは、心理的に優位の者から劣位の者に対して行われるのが一般的であると思われるが、それをよく示している。

3. おわりに

日本語対話文表現における文末詞の待遇的な機能について、現代小説の会話部分を資料として、文末詞の待遇的な射程距離と登場人物相互の親疎の関係や表現内容等に焦点を当て、語用論的な視点から考察してきた。用例として取り上げた談話例は、わずか2例ではあるが、特徴的なこととして、次のようなことが言えるのではなからうか。

前述したように、対話文表現において、文末詞は基本的に親しみの待遇性（「か」は礼儀の待遇性）を発揮するものであり、心理的に優位の者から劣位の者に対する文表現に多く用いられる。その文末詞の待遇効果によって作り出された共感的な心理領域の中で対話が展開されていくのである。その共感的な心理領域の中での対話が深まれば深まるほど、相互の親密度も深まっていくものである。そして、相互の親密度が深まるにつれ、相互の心理的な優劣度も狭まり、文表現における文末詞の使用も相互的なものとなっていく、と考えられるのである。

その過程で、その折々のコンテクストに応じて、話し手と聞き手は相互に様々な文末詞、言い換えれば、待遇的な射程距離の長さの違う文末詞を選択して用いるわけであるが、話し手と聞き手の親密度と心理的な優劣度は、その選択に関わる最も重要な要素である、と言えよう。

どのような親密度、どのような心理的な優劣度において、どのような文末詞の

使用が可能か、という問題については、他の要素と関わっての親密度や優劣度のレベルの検討も含めて、今後の大きな課題である。

最後に、日本語教育に関して言えば、初級レベルの学習者に対しては、次の点は強調されてよい。即ち、敬体表現を用いた文表現の待遇的な重要性和「か」以外の文末詞は親密な聞き手に用いるべきであるという点についてである。

参考文献

- 伊豆原英子(1992)『『ね』のコミュニケーション機能』『日本語研究と日本語教育』名古屋大学出版会
- 上野田鶴子(1972)「終助詞とその周辺」『日本語教育』17号
- 神尾 昭雄(1990)『情報のなわ張り理論』大修館書店
- 佐久間 鼎(1983)『現代日本語法の研究』くろしお出版復刊
- 佐治 圭三(1957)「終助詞の機能」『国語・国文』26巻 7号
- 柴谷 方良(1989)「日本語の語用論」『講座日本語と日本語教育4』明治書院
- 田中 章夫(1977)「文末・句末の表現と語法」『日本語・日本文化』6号
- 中西 泰洋(1992)「日中文表現法の対照的考察—文末詞と語気詞について(Ⅰ)—」『日本語・日本文化』18号
- (1993)「日中文表現法の対照的考察—文末詞と語気詞について(Ⅱ)—」『日本語・日本文化』19号
- 藤原 与一(1982)『方言文末詞〈文末助詞〉の研究(上)』春陽堂書店
- (1985)『方言文末詞〈文末助詞〉の研究(中)』春陽堂書店
- (1986)『方言文末詞〈文末助詞〉の研究(下)』春陽堂書店
- 南 不二夫(1974)『現代日本語の構造』大修館書店
- 森山 卓郎(1989)「文の意味とイントネーション」『講座日本語と日本語教育1』明治書院
- 渡辺 実 (1968)「終助詞の文法論的位置—叙述と陳述再説—」『国語学』72号

用例出典

- 源氏 鶏太(1979)『二十歳の設計』集英社

A Study of “Bunmatsu-shi” it’s Function of Regard towards the Listener

NAKANISHI, Yasuhiro

The objective of this paper is to consider the function of “Bunmatsu-shi”, particularly the function which regards for the listener. “Bunmatsu-shi” is called the “Final Particle”.

In Japanese, many kinds of “Bunmatsu-shi” are used at the end of the sentences, having special meanings and functions. “Bunmatsu-shi” indicates that the speaker has completed an expression, and wishes to hear the listener’s opinion, and also to know whether the listener agree with himself or herself. In spoken expressions, it can be said that “Bunmatsu-shi” is an indicator of the level of the relationship between the speaker and the listener.

In my last paper, I classified “Bunmatsu-shi” into three groups on the basis of it’s meaning and function. The first group consists of ‘Na’ and ‘Ne’, while ‘Yo’, ‘Zo’ and ‘Wa’ form the second group. The third group contains ‘Ka’ and ‘No’. I think that each of the “Bunmatsu-shi” has it’s own “Depth”, which appeals to the listener’s mind and heart. Regarding this “Depth”, ‘Ne’ is deeper than ‘Na’, in the second group ‘Zo’ is the deepest, with ‘Yo’ being deeper than ‘Wa’, while ‘Ka’ is deeper than ‘No’. Therefore in spoken expressions each of the “Bunmatsu-shi” expresses how the speaker regards the listener. In conversations, the speaker uses the “Bunmatsu-shi” which is selected according to the point of subject and the relationship between the speaker and the listener.

Therefore in the teaching Japanese we should emphasize that foreign learners of Japanese at first level should restrict their use of “Bunmatsu-shi(Na/Ne/Yo/Zo/Wa/No)” to only imformal occasions, such as talks with their friends.